

新聞コラムの読ませ方

——論理的思考能力づくりのための自己トレーニング指導——

杉本麗次

はじめに

「国語の力をつける勉強のし方を教えてください」と生徒に問われて、いつも困ってしまう。読書と新聞を読むことをすすめるものは、新聞の読み方については具体的に指示ができないもどかしさを以前から味わってきた。そこで、このもどかしさを解消するために、ここ二、三年の間、中学生を対象に私なりに工夫してきたのが以下に紹介する「新聞コラムの読ませ方」である。

このテーマを本稿にまとめようと思ったのは、今までの経験と勘による指導を整理してみても、私なりに指導の系統性を見出しただけのためである。そこで、今までに指導の赤ペンを入れてきた生徒たちのノートを集め、読み返しながら、私の行なってきた個人指導の足跡をたどってみることにした。

一、なぜ、投書欄を使うか

新聞コラムというと、従来、私は新聞の一面にある、例えば「天声人語」（朝日）の文章を扱ってきた。採られている素材が比較的豊かで、文章にムダがなくよく練られていると感ぜられたからである。とくに中学校三年生から高校生向けには、文章修練のよいテキ

ストになると思われた。しかしながら、中学校の一、二年生には内容的に高度であり、学習を長続きさせるうえで適当ではない。

そこで、次の理由によって、中学校では投書欄を扱うことにした。投書欄は、

① 筆者の主張（価値観）が明確に打ち出されているために、読み手の思考をからませやすい。

② 一日分の紙面に複数の文章が載せられているために、生徒が自分の興味によってテーマを選択できる。

③ さらに、そのテーマが日常生活（時局）に密着しているものが比較的多いために、生徒の関心度が高い。

④ 筆者の年齢層が厚く、文章（内容）にも難易の幅があり、生徒の学力差に対応できる。

他にも投書欄のもつ特性はあろうが、とにかく生徒の学力の個人差に対応ができることと、中学生の価値認識を揺さぶりながら、論理的な思考能力づくりへの指導がしやすいことが最大の魅力だと言っている。したがって、「天声人語」のような文章の味わいを身につけさせることなどは、ねらいの中にはおかない。あくまでも、副題に示したような「トレーニング」に適した文章なのである。

ところ、トレーニングというものは、少ない時間であっても毎日くり返し行なわないと効果を發揮しない。その意味で、新聞というものは、休刊日を除けば、大変便利な教材になり得る。根気をもって学習をすすめることが学力向上につながることを、生徒に指導するうえで有効である。次項で、夏休みの宿題にこの学習をとり入れた例を紹介するが、教科指導と生活指導を直結させていくことの重要性についても、少し触れておきたい。

私たち中学校教師が直面している非行克服の課題は多岐にわたってあるわけだが、その中でも私は、生活リズムの崩れをいかに立て直してやるかを重視している。家庭崩壊を原因とするに限らず、多くの小中学生の基本的な生活リズムは崩されてきており、それが学習意欲を後退させ、青年期の精神的自立を疎外している。私たちは教師は父母とともに、子どもたちの生活の中に入り込んで、その生活のリズムをつくり出す援助をする必要に迫られている。私自身、新聞コラムを毎日読ませる工夫を考えたのも、実はそうした生活リズムづくりの一手段として、生徒と父母に問題提起するためであった。短時間の学習習慣を毎日の生活のどこに位置づけ、それを実行するために親や教師がそれを点検してやりながら、どのように励ますか、ということ提起したかったのである。したがって、そうした生活指導上のねらいも十分に含ませていることを付言しておかなければならない。

二、夏休みの宿題での扱い

四十日間の夏休みは長い。この長い夏休みは、生徒にとって大き

な成長の節目になる。しかし、生活リズムを崩し、反社会的行動をはじめ心のかけりを生んでしまう危険な時期でもある。そういう大切な期間だからこそ、崩れやすい生活を立て直すために役立ててもらおうと、私はここ数年、新聞投書欄の切り抜きを宿題に課している。基礎学力の回復もねらいにおいてはいるが、最大のねらいは、毎日続け、四十日間やり抜くことで、一種の達成感をもたせることである。問題行動や低学力などの点でとくに心配な生徒に対しては、特別の配慮をしながら、担任教師とともに親への協力を要請するのである。温かい励ましを与えつづけるのである。前任教では、学年全体のとりくみとして位置づけてもらい、多くの「心配な子」たちを励ましつづけた。休み中に度々開かれる地区懇談会、学級懇談会、または家庭訪問の中で、そのがんばりを相好をくずして報告してくれる「心配な子」のお母さんが増えた。そして、本人自身もやり遂げたことへの喜びが自信となつて、二学期にはうんと明るい顔で授業にのぞめたようである。そんな実感を私はもっている。以下、そのやり方を示したプリントの中味にそいながら、宿題を紹介してみた。

十一の指示を次のように出した。

① 新聞は何でもよい。投書欄は5ページにのっている。(中国「広場」、毎日「読者の目」、読売「気流」、朝日「声」など)

② 毎日しないと意味がない。歯みがきと同じように毎日のクセにせよ。

③ 作業・まとめは30分以内ですること。(30分をこえて、あまりていねいにやりすぎるとシンドクなり、毎日続かなくなる。要注

意。

④ 次のコース中から、自分の力にあったものを選ぶ。途中でコースをかえてはいけない。やり始めたら最後まで同じコースで四十日間やり抜け。

Aコース——読んで、毎日ノートにはるだけ。ただし、日付は記入すること。

Bコース——Aコースに加えて、⑦読み方や意味がワカラナイ漢字や語句を赤マルで囲む。⑧ナルホドなど思ったところに——線(赤色)をつける。⑨オカシイな、自分は反対意見だと思ったところに——線(赤色)をつける。

Cコース——Bコースに加えて、赤マルで囲んだワカラナイ語句の中から、大切だと思ふものを書き出し、読み方・意味を漢和辞典、国語辞典で調べて書く。

Dコース——Cコースに加えて、文章を読んでみての自分なりの感想や意見をまとめる。

(注…プリントでは、実際の各コースのモデルを示したが、ここでは省略をする。136ページに生徒のノートを一部紹介しておくので参照されたい。)

⑤ 大学ノート(大判)を一冊用意する。

⑥ 表紙にコース名を大きく書く。もちろん組、氏名もはっきりと。

⑦ ノート一ページにはる新聞の数は二つぐらいがよい。新聞の形がちがうので、各自で工夫をする。

⑧ 合理的に早くできるように工夫する。例えば、のりづけなどはかんたんでよい。ひっついていればよい。ていねいにしようと思

いすぎると長続きしない。

⑨ やり方は以下に例を示すが、よくわからない者は早めに相談する。

⑩ 期間は $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{8}$ とする。

⑪ 休み明けにノートを提出する。

(注…評価は、各コースを点数化して、二学期の成績に組み入れた。)

前述したように、投書欄そのものが生徒の学力の個人差に対応できる条件をもっているが、この宿題ではさらに四つのコースに分け、生徒自身の判断で自分の学力に応じた学習をすすめられるようになっている。しかし、コース選びに際しては、生徒一人ひとりの力をよく見抜き、適切な助言を与えることが肝心である。ヤル気だけでは長続きしないからである。要は、毎日続けさせることである。そして、その結果の達成感を持たせることなのである。

こうして四十日間、この学習をやり切った生徒を私は大きく評価してはめてやる。それはAコースだろうがDコースだろうが同じである。もっとも、実際にはCコースを選ぶ生徒が多く、Aコースは非常に数が少ない。これはうれしいことである。Dコースにチャレンジする者も、例年意外に多いように思われる。ただ、どのコースであれ、四十日間、休刊日を除いて一日も休まずに続けられる生徒というのはほんのわずかしかない。二、三日抜けたりすることは、キャンパやその他のトラブルもあり、しかたのないことである。しかし、私の当初の予想よりは、うんと多くの生徒が自分なりの努力をにつけ、親も共感と励まし援助をしていてくれるようである。

段階では、　　線は能力的につけていくのが実状であるが、それでも学年が進むにしたがって、この反応は鋭さを増していくのは事実である。思考能力が練られてくるとともに、価値認識が発達してくるからである。

ステップ3

語彙力をつける基礎作業（Cコース）

ここでは、語句の読み方・意味を辞書を使って調べる作業を加える。あえて作業という言い方をしたのは、辞書をひいて意味を書き写すだけでは、一般的にはなかなか力が定着しないからである。しかし、この作業なくしては、国語の学習は前へ進まない。そういった意味では大切な学習だということになる。辞書をひくことに抵抗感を持たなくさせることも重要な指導である。

ステップ4

感想・意見をまとめる（Dコース）

今までの段階から、ここで少し飛躍をする。投書を読んでみての感想あるいは意見をまとめてみるのである。最初であるから、まとめる量にはこだわらない。むしろ、自由に思ったまま、感じたままを書かせるのがよい。筆者の主張とかみ合わなかったり、文章の一部分をとりあげて、瑣末的な感想になることが多く見られるが、それでもかまわない。また、　　線はひけていても、そのことに関した批判的な意見が出てくるのも少なく、全体的に筆者の考えを肯定し同情する内容に偏ることも少なからずあるようである。しかし、

とにかくこの段階にあっては、どんどん書かせることを第一のねらいにおきたい。

ステップ5

短文づくり

ステップ3で、語彙力をつけるための基礎作業を提示しておいたが、そうしてしばらくの間辞書をひかせてくると、しだいに単なる意味調べから、視野が一步拡がってくるはずである。つまり、辞書には意味だけが載っているのではなくて、同意語、反対語をはじめ句例・文例などが紹介してあって、読めることへのおもしろさに基づくものである。また、そうしたおもしろさに気づかせていかなければならない。そうするうちに、その語のもつ概念の広がりを認識しはじめるであろう。そのひとつの手段として、短文づくりをさせて語を生きた文の中で意味づけさせていくのである。例えば、

《違法…いほう》

法律や規則にそむくこと。

⊗ 違法行為は罰せられて当然だ。

という簡単なものでよい。数も最初はひとつでよい。慣れてきたところで、徐々にその数を増やしていけばよいのである。また、最初は、辞書にそうした例が載っているばあいにはそれを写させた方がよい。これもしだいに自分で作るたのしみにまで発展するものである。また、文例と指示しても、句例になったりするばあいもあるが、徐々に文認識をつけてやれば問題はない。

こうして、語彙力をつけていくことが文章の読解に際しても、作

文に際しても不可欠の要素となることは言うまでもない。

ステップ6

感想文の肉づけ

この辺りから、全体的な中だるみ傾向に陥ることと、短文づくり
に手がとられて、感想・意見の文章が、内容的に後退することがあ
る。そこで、感想・意見の文章の内容に目を通してやり、部分的、
皮相的な感想のとりあげ方を指摘しながら、文章の肉づけにより、
量的にも長く文章をまとめるよう助言を与えるようにするとよい。
それには、自分の経験している身近な例などを書き加えるなどの助
言が有効ではないかと思われる。しかしながら、あまり無理をして
一日の学習時間が30分を越えるようなことはさせないよう留意すべ
きである。負担になりすぎて、自滅してしまうことにもなりかねな
いからである。生徒の個性なども配慮してやらなければならない時
期である。

ステップ7

文末の「思う」をやめる

ステップ6がやや抽象的な助言になっていたので、ここでは具体
的な指示を出してやる。全体的に比較的長めの感想・意見文になっ
ているのを、今度はひきしめるのである。今まで自由に思ったまま
を書かせてきたので、生徒の文章には必ずといってよいほど、文末
表現に「〜と思う」が頻出している。言うまでもないが、「思う」
表現は、筆者の意見に対する対決姿勢を弱め、自らの論理的思考能

力をにぶらせてしまう。言わば、逃げの思考をつくってしまうので
ある。「思う」すべてが悪いわけではないが、思考トレーニングで
あるので、生徒にはあえて、使わないようにという強い指示を出し
た方が効果的である。あえて断定表現を使わせることにより、筆者
の論理や考え方に強く迫らせるのである。追い込むのである。この
指示によって、いったん長く書かせたダラダラ文は、うんと内容的
にもひきしまつてくるはずである。そうして、ひきしまった文章が
書けるということは、おだやかな中に厳しい視点(考え方)が生ま
れてきたのだ、とその生徒の人格的な成長を評価してやることを忘
れてはならない。こうしたほめ言葉によって、生徒はうんとヤル気
を起し、自主性が伸びてくるのである。

ステップ8

一文を短くする

ステップ7のばあいと指導のねらいは同じである。思考能力にさ
らに切れ味をつけるために、ダラダラ文を短くさせるのである。文
を短く書かせることによって、接続詞もうまく使わなければならな
いようにさせていく。自分の論理的思考の道筋を意識化させるので
ある。

このあたりの段階になると、筆者の文章を読む姿勢も変わってく
るようである。それは、ステップ2で指示した——、——線が以前
のように散漫ではなく、かなりしっかりつけられていることからも
うかがわれる。読む力と書く力が相乗効果をなしてくるわけである。
蛇足になるが、この時期あたりから、生徒に新聞への投稿をすす

めてみてはどうだろうか。国語力も少しずつついてきているし、また、意欲的にもそのような積極性をかりたててよい時期であるからだ。以前の経験では、もっと早い段階でこれをすすめ、数回採用された生徒も数名いた。「頭がよくなるし、有名になるし、おまけに図書券ももらえる。一挙三得だ。」と言ってやりながら、是非すすめてみたいことである。

ステップ9

反対の立場で反論

さて、実質的には最終段階である。思考トレーニングとしては高度になるが、あえて筆者の主張、考えに逆らって反対意見を述べてみるのである。正しいと思うようなことでも、無理を承知で反対の立場でものを見る訓練である。この方法は、論理的思考能力を鍛えるためには、大変有効な手段であると私は思っている。中学生の段階では、内容的には、揚げ足とりになったり、批判の名に値しないおそまつな中味になることが多い。しかしながら筆者の考えに肉迫して相手の文章を読み、自分の考えをすすめようとする姿勢が生まれることにはまちがいない。この時期の投書の文章には、 線が多く現われてくるのである。このことから、その格闘の様子がうかがい知れるだろう。

また、批判の名に値しないケチをつける内容になっているばあいには、それを書いている本人自身が、自分の論理の破綻についてよく自覚もするものである。自分の限界(己の存在)を知る上でも、中学生にとっては大切な営みになるにちがいない。

このステップは、以上のように学習内容が多少高度になることから、生徒にとっては困難もつきまとうが、途中、内容面での助言を与えながら、できれば今までのステップよりはやや長めの期間(例えば二カ月間)を指示してやらせてみたい。

ステップ10

元へもどって自由に並べる

一応の完成段階である。ステップ8あたりの要領にもどって、自分の率直な感想・意見を述べさせるのである。こうして、ステップ9での厳しい制約をといてやると、質的にはかなり豊かな文章を書くようになるだろう。自由にかつ慎重に相手の文章が読めるようになっているので、感想・意見の文章が伸び伸びとして、主体性も持ちあわせたものへと発展していくのである。

現在のところ、私はこの段階で一応の指導を終了させている。中学一年生から二年生あたりまでを想定した指導が終ったわけである。このステップ10を、あとは続けさせてやればよいと思っている。レベルが上がる楽しみはなくなってしまうが、あとは本人の自主性と克己心と努力を頼むしかない。例えば、二年生のある男子生徒に、私は次のような助言をノートに書いてやっている。

(前略)

さて、このノートを読ませてもらって、君自身の言うように、確かに力がついてきていることを感じとりました。さらに、君自身力がついてきたと感じることがとても進歩であることです。

先生が傍について見てやれないのですが、君はもう先生の指導を

乗りこえて自立しています。自立しているというのは、先生が言わなくても自分ひとりで続けていくことができるレベルに達したということですよ。君は、自分ひとりである程度つづけられます。(もっとも、この勉強は自分自身を鍛えるためのものですから、他人に見てもらってどうのこうのとほめ言葉をもらうべきものではないのですが。)

今からが本当に自分との孤独、闘いの始まりなのです。その覚悟(誰からもほめられない、自分との孤独の闘い)が君にあるものとして、以下に最終の指示をだします。

(後略)

もっとも、中学校三年生や高校生あたりには、教材として投書欄は卒業させ、「天声人語」(朝日)のようなコラムを使わせてもよいと思う。ただ、まとめる方法はステップ10の要領でよいわけである。以上、ほぼ一年間を見通した継続指導のためのステップを順を追って考えてみたわけであるが、もちろんこれは私案であって、十分な根拠をもつ系統案にはなっていない。また、生徒の個人差を考えたばあいに、この通りに進展するはずもない。そのあたりを考慮に入れていただいて、御批判をくださるようお願いしたい。

おわりに

本稿では、中学生を対象として「新聞コラムの読ませ方」をまとめてみた。私のこの二、三年間のささやかなとりのくみを文章化したにすぎない。とくに、継続指導のあり方については、現在のところ対象生徒の数が少ないうえに、かなりの自主性をもった生徒に限ら

れているのが現状である。これを、より多くの生徒(できれば学級全体)に拡げていく工夫は、まだ見出せてはいない。月一回の指導とは言っても、授業担当クラスの生徒全員となると、困難な条件も多い。夏休みの宿題としての扱っただけに終らせず、もっとそれを押し拡げていきたいのであるが、うまい方法が見つからないでいる。そのあたりを、将来的な課題にすえなければならぬと思っている。しかしながら、今回のまとめで、私なりに指導段階の整理はできたように思う。今後、指導の質をさらにどう深めていくかという課題を、実践を通して追究してみたい。

(84・8・15)

(広島市立祇園東中学校教諭)